大学生の自伝的記憶とアイデンティティ

髙　城　裕佳子

問　　題

自伝的記憶（autobiographical memory）とは，人が生涯を振り返って再現するエピソードのことである。人は，より良く生きていくためにはどのように行動したら良いかを考える時に参考とするなど，常日頃から自伝的記憶を想起している。自伝的記憶には自己（self）機能・社会（social）機能・指示（directive）機能・高齢者における回想の機能という4つの機能がある（佐藤，2002, 2004）。自己機能は，自己の一貫性を与える。社会機能は，会話に自分の経験を盛り込むことで人に何かを教えたり，愉しませたり，会話の内容の本当らしさを高めることができる。また，集団で記憶を共有することで，メンバー間の親密度が高まったり，集団としての動機付けが高まったりする。指示機能は，将来に向けて動機付けたり価値観や態度を確認したりする際の，重要な参照点となる。高齢者における回想の機能は，未解決の心理的葛藤を解決し，人生の受容などパーソナリティーの再構成に役立つ。

Rubin ら（1998）は，「自伝的記憶の集合体は個人のアイデンティティ（identity）を形成する」と述べている。自伝的記憶は個人の歴史であり，自伝的記憶を集めることでその人の個性を見ることができる。自伝的記憶はその人のアイデンティティを作るものの1つだと言うこともできる。谷（2004）によれば，Erikson の言うアイデンティティとは，「斉一性・連続性をもった主観的な自分自身が，まわりからみられている社会的な自分と一致するという感覚」である。自らのアイデンティティを探求して確立することは，青年期に課せられた最も重要な課題である。青年は，その人がかつてそうであり，また現在なりつつあるものと，そこから考えている自分と，社会が認めかつ期待しているものを統合して，一貫した自分自身を作り上げていく。このため，アイデンティティを形成するには，過去の記憶を呼び起こして再構成する必要がある。このことから，アイデンティティと自伝的記憶の想起との関係について検討することは，重要かつ意味があることと言える。したがって本研究では，自伝的記憶をアイデンティティと絡めてみていくこととする。

ところで本論文では，従来，自我同一性，同一性，アイデンティティなどと記述されていたものを，現代の動向に従って「アイデンティティ」と記述する。ただし，他の文献で自我同一性と記述されているものの引用などにおいては，その通りに記述した。

アイデンティティを検討する代表的な方法として，無藤（1979）の自我同一性地位面接がある。無藤は Marcia（1966）の手法を日本の青年向けに再検討した。Marcia は，アイデンティティを職業・宗教・政治の領域に分けている。そして，Erikson の考えに基づいて危機と傾倒という2つの基準を設け，それぞれの領域において，重要な選択の中で真剣に悩みながら決定する**危機**（crisis）の経験の有無と，明確な信念に基づいて積極的に関与し行動する**傾倒**（commitment）の有無の組み合わせから同一性地位を決定する。こうして，達成（Achievement）・早期完了（Foreclosure）・モラトリアム（Moratorium）・拡散（Diffusion）という4つの地位に類型化した。2基準の組み合わせと4つの地位の定義は，表1（無藤，1979より引用）の通りである。

アイデンティティの形成において自伝的記憶が一定の役割を果たしているとすれば，同一性地位によって，想起する自伝的記憶の再構成の程度や自伝的記憶の主観的な想起頻度などに違いが現れてくるはずである。そこで，本研究では，4つの同一性地位によって，想起された自伝的記憶の構成度に相違がみられるかどうかを検討することとする。その際，自伝的記憶については下記の植之原の研究を土台にする。

植之原（1993）は，大学2～4年生44名を対象に「自我同一性地位達成過程における『事象の記憶』」を研究した。『事象の記憶』とは各人の経験を形成する個々の事象について現在保存している記憶であるので，本論文で言う自伝的記憶にほぼ対応する。植之原

表1　自我同一性地位（無藤，1979）

自我同一性地位	危機	傾倒	概　　略
同一性達成（Identity Achievement）	経験した	している	幼児期からの在り方について確信がなくなりいくつかの可能性について本気で考えた末，自分自身の解決に達して，それに基づいて行動している。
モラトリアム（Moratorium）	その最中	しようとしている	いくつかの選択肢について迷っているところで，その不確かさを克服しようと一生懸命努力している。
早期完了（Foreclosure）	経験していない	している	自分の目標と親の目標の間に不協和が無い。どんな体験も，幼児期以来の信念を補強するだけになっている。硬さ（融通のきかなさ）が特徴的。
同一性拡散（Identity Diffusion）	経験していない	していない	危機前（pre-crisis）：今まで本当に何者かであった経験が無いので，何者かである自分を想像することが不可能。
	経験した	していない	危機後（post-crisis）：全てのことが可能だし可能なままにしておかなければならない。

（1993）は面接法を用いて，職業領域と価値観領域の同一性地位を決定した。また，大学，専攻，将来，尊敬・影響を受けた人，よいと考える基準，生きていく上で大切なこと，という6項目について，それぞれの命題（項目の答え。大学なら，現在通っている大学名）と，そうするように考えるようになったきっかけにあたる『事象の記憶』を尋ねた。ここで言う命題とは，自己の問題についての明確に認識された見解である。次に，各項目について，記憶の構成度を特定性，精緻性，自我関与，命題性，関連性という5つのカテゴリーごとに4段階で評定した。分析の結果，達成群の『事象の記憶』は命題との関連が高く，記憶が再構成されていることがわかった。そして，アイデンティティの形成過程において『事象の記憶』が繰り返し参照され，現在の命題との関連を深めるのではないかと考察した。しかしこの研究では，職業領域の拡散群と，価値観領域のモラトリアム・拡散群のサンプル数が少なく，達成群と対照できていない。そこで本研究では，全ての同一性地位が出現するようなサンプリングを心がけることとした。

仮説としては，モラトリアム群はアイデンティティを達成しようとしているので，自己の定義付けを行うために自伝的記憶を多く想起するだろうと考えられる。一方，達成群はすでに達成しているので，それほど多くの自伝的記憶を想起する必要はないだろう。また，植之原（1993）にみられるように，命題との関連が高いだろう。拡散群では独自のアイデンティティを想像することが不可能であり，現時点ではアイデンティティの達成を放棄していると考えられる。したがって，他群よりも自伝的記憶を想起することが少ないのではないか。つまり，自伝的記憶の想起頻度は，モラトリアム群＞達成群＞拡散群の順で多くなると予想される。そして達成群では，自伝的記憶の命題への関連性も高いだろう。

また，自伝的記憶の機能に関しても，モラトリアム群＞達成群＞拡散群の順で自己の一貫性を必要とし，これからどう生きていくかの検討を行わなくてはならない。したがって，この順で自伝的記憶が自己機能や指示機能をはたす度合いが高いと考えられる。自伝的記憶の機能を測定するためには，日下（2000）の回想機能尺度を使用する。仮説としては，自伝的記憶の自己機能・指示機能に対応すると思われる自己確認・方向づけ因子の得点が，モラトリアム群＞達成群＞拡散群の順で高くなるだろう。

なお，自我同一性地位面接の結果の有効性を確かめるために，谷（2001）の多次元自我同一性尺度（MEIS；Multidimensional Ego Identity Scale）を使用し，同一性地位と，多次元自我同一性尺度の関係を検討することとする。達成群＞モラトリアム群＞拡散群の順で多次元自我同一性尺度の下位尺度得点が高くなれば，自我同一性地位面接の結果が有効であると言えるだろう。

目　　的

それぞれの同一性地位における自伝的記憶について，以下の2つの仮説を検討する。

仮説①　モラトリアム群＞達成群＞拡散群の順で，自伝的記憶の主観的な想起頻度が増え，自伝的記憶を自己機能・指示機能として用いることが多くなるのではないか。

仮説②　達成群＞モラトリアム群＞拡散群の順で自伝的記憶はより再構成され，命題との関連が高いだろう。

方　　法

調査者：臨床心理学コース，博士前期課程2年。20代前半，女性。本論文執筆者。

被調査者：女子大学生50名（平均20.24歳，SD 1.76）。専攻は多義に渡る。

実施方法：1対1の面接法で行った。面接は録音し，会話の概要を記述した上で分析した。また，質問紙も使用した。実施期間は2006年10月～12月だった。

調査の構成：

・面接①**自我同一性地位面接**：無藤（1979）が，Marcia（1966）の手法を日本の青年向けに修正し，評定方法を改善したものである。無藤（1979）は研究の結果，〈宗教〉領域を廃止し，代わりに〈価値観〉領域を設置した。また，危機と傾倒の評定方法をそれぞれ4段階評定とした。

本研究では，植之原（1993）に基づき，3領域のうち〈職業〉と〈価値観〉の2領域を実施した。また，無藤（1979）は導入という領域も設けており，大学や専攻について尋ねる項目がある。これは，自伝的記憶面接で取り上げる項目と関係があるため，本研究の参考資料となると判断し，判定はせず，質問のみ実施することにした。

面接時間は8分43秒～43分50秒で，平均21分43秒だった。

・面接②**自伝的記憶面接**：植之原（1993）が（1）大学，（2）専攻，（3）将来，（4）尊敬・影響を受けた人，（5）よいと考える基準，（6）生きていく上で大切なこと，という6項目について，そう考えるようになったきっかけを質問したものである。（1）～（3）は自我同一性地位面接の職業領域，（4）～（6）は価値観領域に対応する項目である。これらは無藤（1979）の自我同一性地位面接から取り出した項目であるので，（3）将来は「将来の職業」として質問した。

質問はまず，「大学はどこですか」など，項目について尋ねた。次に「どういうところからそう考えるようになりましたか」と尋ね，質問内容がわからない場合は「そう思うようになったきっかけはありませんか」と表現を変えて質問した。具体的な記憶に遡れそうな場合は更に質問を重ね，「特にない」「なんとなく」といった回答の場合は質問をやめた。

面接時間は5分49秒～45分1秒で，平均19分37秒だった。

評定は，各項目に対して，記憶の構成度を①特定性，②精緻性，③自我関与，④命題性，⑤関連性という5つのカテゴリーで4段階評定した。①～③は『事象の記憶』の発話，④は項目の答え，⑤は項目の答えと，『事象の記憶』の発話を評定対象とした。なお，植之原の評定基準で『事象の記憶』となっていた点を「自伝的記憶」に読み替えて評定した。しかし，植之原の基準は不明確な部分が多々あった。そこで，カテゴリーごとで評定したいことを明確にし，植之原の基準を崩さないようにしながらも，評定基準を明確に規定し直した。これを，筆者独自の詳細な基準として，表2に示した。また，わかりにくい基準には，同時に例文も載せた。

次に，記憶の構成度の5つのカテゴリーごとに，6つの質問項目のうち，職業領域に属する（1）～（3）項目の得点，価値観領域に属する（4）～（6）項目の得点をそれぞれ合計し，各領域におけるカテゴリー得点を算出した。

・質問紙①**多次元自我同一性尺度**（谷，2001）：「全くあてはまる（7点）」から「全くあてはまらない（1点）」の7段階評定。20項目を使用した。

下位尺度は4因子（各因子は5項目ずつ）で，Eriksonの記述に基づいて下位概念が設定されている。第1因子は「自己斉一性・連続性」因子で，アイデンティティの感覚における自己の不変性，および時間的連続性についての感覚を意味する。第2因子は「対自的同一性」因子で，自分自身が目指すべきもの，望んでいるものなどの，自己意識の明確さの感覚を意味する。第3因子は「対他的同一性」因子で，他者から見られているであろう自分自身が，本来の自分自身と一致しているという感覚を意味する。第4因子は「心理社会的同一性」因子で，現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという，自分と社会との適応的な結びつきの感覚を意味する。

・質問紙②**回想機能尺度**（日下，2000）：「よくある（6点）」から「全くない（1点）」の6段階評定。41項目を使用した。

下位尺度は4因子である。第1因子は「自己確認・方向づけ」因子（13項目）で，自分がどのような人間なのか，どのようにして今のような自分になったのかをより理解し，それを参考にしてこれからの事を考えるための回想である。第2因子は「気分安定・自己高揚」因子（13項目）で，現在のネガティブな状況に対し，ポジティブな状態に持ってい

表2　自伝的記憶面接における，筆者独自の評定基準

評定に当たっての注意

※命題について，そう考えるようになったきっかけの自伝的記憶がいくつか出ている場合は，その人にとって最も大きく，詳しく述べられたもので評定する。
※自伝的記憶は，評定に必要な発言のみ得点に値する。したがって全ての発言を評定に用いるわけではない。
※自伝的記憶で同じ内容を言っているものは，2回以上表現されていても1つとみなす。
※自伝的記憶面接では，6つの項目ごとにその命題と，そう考えるようになったきっかけを尋ねる。これより，自伝的記憶のカテゴリー①特定性・②精緻性・③自我関与は，きっかけにあたる自伝的記憶の発言から評定する。④命題性は，命題の発言のみから評定する。⑤関連性は，命題ときっかけにあたる自伝的記憶の両方から評定する。
※前の項目で発言した自伝的記憶の内容が，以降の項目のきっかけにもあてはまりそうな場合は，本人に確認した上で，前の項目での発言も以降の項目の評定対象に含めた。

評定基準（植之原の評定基準に付加）

①特定性（記憶が特定化される程度を示す指標）
（1）時空間が明確か　→「この時」と特定できるか
　例）高3の冬の進路指導の後で
（2）（a）一度だけの特定事象か　（b）何度も繰り返されたものか
　→一度だけの特定事象とは，きっかけとなった，一度だけの特定された出来事をはっきりと思い出せる場合
　→何度も繰り返されているものとは，漠然としており特定の時が出てこない場合
（3）（2）（b）の場合，短期的なものか長期的なものか
　→短期的とは，出来事が限定できる時　例）高3の冬
　→長期的とは，漠然とぼやけている時　例）高3

②精緻性（記憶の詳しさを示す指標）
（1）状況の説明
（2）行為者としての説明
}これらにおいてどれだけ異なるテーマを挙げるか

③自我関与（自己の関わりの程度を示す指標）
（1）自己の思考（「－と考えた」「－と思った」など）
（2）自己の感情（「うれしくて」「感動して」など）

④命題性（自己に関連する問題についての認識の明確さを示す指標）
過去の出来事ではなく，現在の問題に対する考えを評定対象とする。
（1）明瞭に定義づけ述べたもの（3点）　例）心理学　楽しいこと
（2）（1）に加え，形容詞などで修飾したりより詳しく述べたもの（4点）
（3）命題を述べるがそれほど詳しくないもの（2点）
（4）迷い・曖昧さがみられるもの（1点）

⑤関連性（現在と過去との結びつきの程度を示す指標）
命題と，そのきっかけとなった出来事の記憶の関連の程度。
（1）（a）自伝的記憶を整理し，関連付けて用いるとは，記憶を順序立てて，過去から時系列に乗って説明するもの，話の流れがわかるもの
　（b）直接的に用いるとは，原因となった事実のみを述べるもの
　例）家が近いから
（2）（1）（b）で述べられた自伝的記憶が2項目以上か（3点）　1項目か（2点）述べないか（1点）

くための回想である。第3因子は「反省・振り返り」因子（8項目）で，過去の出来事の意味づけの変化を促したり，自己嫌悪や自責によって不安になったり自己評価を下げたりすることに繋がる回想である。第4因子は「会話・情報伝達」因子（7項目）で，過去の自分の経験を人に話して役立てるための回想である。

回想機能尺度は，各因子を自伝的記憶の機能に照らし合わせることができる。回想機能の第1因子（自己確認・方向づけ因子）は自伝的記憶の自己機能・指示機能，第3因子（反省・振り返り因子）は高齢者における機能，第4因子（会話・情報伝達因子）は社会機能に対応すると考えられる。第2因子（気分安定・自己高揚因子）は自伝的記憶の機能と対応するものが無い。しかし榊（2006）によると，Erber & Erber（1994）は，「人はネガティブな感情のとき，ポジティブな自伝的記憶を想起する」と述べている。ポジティブな自伝的記憶を想起することでネガティブな気分が緩和されることもあるので，自伝的記憶には気分安定の機能もあると考えられる。したがって，本論文では自伝的記憶に気分安定機能があると仮定し，回想機能尺度の第2因子に対応すると考えることとした。

回想機能尺度は，自伝的記憶における機能を調べるために，「回想」を「自伝的記憶」に読み替えて使用した。

・質問項目①**自伝的記憶の主観的な想起頻度**：「よくする（5点）」から「全くしない（1点）」の5段階評定。「普段，自伝的記憶の回想をよくしますか？」という1項目のみであった。

調査手続き：**自我同一性地位面接，多次元自我同一性尺度，回想機能尺度，自伝的記憶の主観的な想起頻度**をこの順で実施した。数日後，**自伝的記憶面接**を実施した。

結果と考察

(1) 自我同一性地位の評定と分布

無藤（1979）の評定基準により分類したところ，アイデンティティの〈職業〉領域では，達成群 11 名，早期完了群 10 名，モラトリアム群 17 名，拡散群 12 名だった。〈価値観〉領域では，達成群 13 名，早期完了群 24 名，モラトリアム群 4 名，拡散群 9 名だった。評定者間の一致率（調査者と，大学院博士後期課程心理学専攻の女性）を，被調査者 50 名中ランダムに選んだ 10 名のデータを用いて，コーエンの κ によって求めた。領域ごとに，〈職業〉$\kappa=.62$，〈価値観〉$\kappa=.70$ であった。〈価値観〉領域での一致率は許容できる値であるのに対して，〈職業〉領域での一致率がやや低く，今後検討すべき課題である。各被調査者の〈職業〉と〈価値観〉領域の同一性地位の組み合わせについて，パターンごとのサンプル数（%）を表 3 に示した。〈職業〉領域と〈価値観〉領域の同一性地位が同じ人は少ないと思われる。〈職業〉領域では各同一性地位に同数程度存在しているのに対し，〈価値観〉領域では早期完了群が多い。したがって，〈職業〉領域のどの同一性地位の人も，〈価値観〉領域では早期完了群である人が多いということが表れている。また，一方の領域では達成群であるのに対し，もう一方では拡散群である人も居たことがわかる。アイ

表 3　職業と価値観領域の同一性地位の組み合わせごとのサンプル数（%）

		価値観領域				合　計
		達成群	早期完了群	モラトリアム群	拡散群	
職業領域	達成群	3(6)	7(14)	0(0)	1(2)	11(22)
	早期完了群	2(4)	6(12)	0(0)	2(4)	10(20)
	モラトリアム群	5(10)	6(12)	3(6)	3(6)	17(34)
	拡散群	3(6)	5(10)	1(2)	3(6)	12(24)
合　計		13(26)	24(48)	4(8)	9(18)	50(100)

表 4　同一性地位（職業領域）と多次元自我同一性尺度の下位尺度の平均値（SD）と分析結果

	達成群(A)	早期完了群(F)	モラトリアム群(M)	拡散群(D)	F	p	多重比較
第 1 因子 自己斉一性・連続性	26.55(4.03)	25.10(3.73)	22.29(6.37)	22.25(4.57)	2.04	n.s.	
第 2 因子 対自的同一性	24.73(3.74)	25.10(2.51)	17.71(6.09)	18.75(4.57)	7.91	**	A>M·D, F>M·D
第 3 因子 対他的同一性	24.64(4.07)	21.20(4.29)	20.71(3.98)	19.67(3.30)	3.20	*	A>(M)·D
第 4 因子 心理社会的同一性	24.45(3.99)	21.80(4.02)	20.41(4.53)	19.25(4.71)	2.84	*	A>(D)

注）n.s. は p≧.10，＋は p<.10，*は p<.05，**は p<.01 を表す。
多重比較より有意差（p<.05）が生じた結果に不等号を示した。
（　）内は有意差の傾向（p<.10）がある事を示す。

表 5　同一性地位（価値観領域）と多次元自我同一性尺度の下位尺度の平均値（SD）と分析結果

	達成群(A)	早期完了群(F)	モラトリアム群(M)	拡散群(D)	F	p	多重比較
第 1 因子 自己斉一性・連続性	23.00(6.00)	23.79(5.55)	21.50(2.70)	25.89(3.64)	0.78	n.s.	
第 2 因子 対自的同一性	21.77(5.81)	22.21(5.58)	13.50(1.12)	19.89(4.65)	3.09	*	A>M, F>M
第 3 因子 対他的同一性	21.46(3.86)	22.33(4.74)	18.25(2.59)	20.33(3.27)	1.27	n.s.	
第 4 因子 心理社会的同一性	21.62(4.40)	21.46(5.38)	19.00(2.83)	21.44(3.75)	0.32	n.s.	

注）n.s. は p≧.10，＋は p<.10，*は p<.05，**は p<.01 を表す。
多重比較より有意差（p<.05）が生じた結果に不等号を示した。

デンティティにおいて領域は独立したものであり，関連性は少ないと予想できる。

(2) 同一性地位と多次元自我同一性尺度により測定されるアイデンティティとの関連

多次元自我同一性尺度の項目の得点を，因子ごとに合計した。多次元自我同一性尺度と自我同一性地位面接の結果の関係を検討するために，自我同一性地位面接の結果を独立変数，多次元自我同一性尺度の結果を従属変数として，アイデンティティの領域ごとに，ANOVA 4を用いて1要因分散分析を行った。各領域における，同一性地位ごとの多次元自我同一性尺度の下位尺度得点の平均値（SD）と分析結果を，領域ごとに表4と5に示した。

分散分析の結果，アイデンティティの〈職業〉領域では，多次元自我同一性尺度の第2因子（対自的同一性）において，要因の効果が有意だった（$F(3,46)=7.91$, $p<.01$）。Ryan法による多重比較の結果，達成群と早期完了群が，それぞれモラトリアム群と拡散群よりも5%水準で有意に高いことがわかった。第3因子（対他的同一性）において，要因の効果が有意だった（$F(3,46)=3.20$, $p<.05$）。Ryan法による多重比較の結果，達成群が拡散群よりも5%水準で有意に高く，モラトリアム群よりも高い傾向があることがわかった。第4因子（心理社会的同一性）において，要因の効果が有意だった（$F(3,46)=2.84$, $p<.05$）。Ryan法による多重比較の結果，達成群が拡散群よりも高い傾向があることがわかった。

〈価値観〉領域では，第2因子（対自的同一性）において，要因の効果が認められた（$F(3,46)=3.09$, $p<.05$）。Ryan法による多重比較の結果，達成群と早期完了群が，それぞれモラトリアム群よりも，5%水準で有意に高いことがわかった。

この結果から〈職業〉領域では，第2因子（対自的同一性）と第3因子（対他的同一性）は，達成・早期完了群が，モラトリアム・拡散群よりも得点が高いと考えることができる。また第4因子（心理社会的同一性）にもこの傾向が認められる。ここで，達成・早期完了群はより命題に傾倒しているのに対し，モラトリアム・拡散群はあまり命題に傾倒していない。命題に傾倒しているということは自分の信念を明確に意識しており，それを表現し，それに基づいて行動することができることを意味する。このような人が，自分自身が目指すべきものや望んでいるものなどを明確に意識できるという，対自的同一性が高くなるのは当然である。さらに，自分の信念を明確に表現しているので，他者からもそのように見られることが予想できる。したがって，他者から見られているであろう自分自身が本来の自分自身と一致していると感じることができるという，対他的同一性も高くなったのだと考えられる。また，このような傾倒ができている人は，自分の信念を持って社会とどのように結びつき，自分をどのように社会に位置づけるかということも考えるであろう。したがって，自分と社会との適応的な結びつきである，心理社会的同一性も高くなったのだろうと推測される。

谷（2001）によると，Erikson（1959）は「アイデンティティの感覚とは，内的な斉一性と連続性を維持する個人の能力（心理学的意味での個人の自我）が，他者に対して自分が持つ意味の斉一性と連続性とに調和することから生じる自信である」と述べている。アイデンティティの感覚においてまず重要だと考えられるのは，自己の斉一性・連続性であるのではないか。これより，自己の斉一性・連続性は，同一性地位以前の問題であるのかもしれない。したがって，第1因子（自己斉一性・連続性）は要因の効果が有意でなかったのではないかと思われる。

〈職業〉領域では同一性地位による差が3つの因子に認められたのに対し，〈価値観〉領域では1つの因子にしか認められなかった。つまり，〈職業〉領域では差が出やすいが，〈価値観〉領域では出にくいと言える。多次元自我同一性尺度の得点が〈価値観〉領域における同一性地位とは一致しにくいのかもしれない。また自我同一性地位面接に関しても，無藤（1979）がMarcia（1966）の面接のうち〈宗教〉領域を〈価値観〉領域に変更したものであるが，欧米における〈宗教〉領域と日本における〈価値観〉領域とでは同じとは言えない。更に大学生の女性において，〈職業〉領域は具体的に目前にあるものであり，達成へ向かう段階であるのに対し，〈価値観〉領域は抽象的で摑みにくく，明確にしておかなければいけないということもない。したがって〈価値観〉領域よりも〈職業〉領域の方が，差が見られたのではないだろうか。

上で述べたように，達成・早期完了群が，モラトリアム・拡散群に比べて下位尺度の得点が高かった。これは，大方2領域とも同じような結果である。モラトリアム群と拡散群において有意差が認められなかったので，達成群＞モラトリアム群＞拡散群の順で多次元自我同一性尺度が高くなったとは言えないが，本研究

で行った自我同一性地位面接の結果は，ある程度妥当なものであると考えられる。

(3) 同一性地位による自伝的記憶の想起頻度の差

自伝的記憶の想起頻度と自我同一性地位面接の結果の関係を検討するために，自我同一性地位面接の結果を独立変数，想起頻度の結果を従属変数として，アイデンティティの領域ごとに，ANOVA 4 を用いて 1 要因分散分析を行った。各領域における，同一性地位ごとの，自伝的記憶の主観的な想起頻度の平均値（SD）と分析結果を，領域ごとに表 6 と 7 に示した。

分散分析の結果，アイデンティティのどの領域も，要因の効果は有意でなかった。したがって，モラトリアム群＞達成群＞拡散群の順で自伝的記憶の主観的な想起頻度が増えるのではないか，という仮説①は証明されなかった。

この結果から，同一性地位によって日常の自伝的記憶の想起頻度には差が無いのではないかと考えられる。しかし本研究では「普段どの程度自伝的記憶を想起しているか」を 5 段階で評定し，具体的に質問しなかった。例えばアイデンティティの領域別に想起頻度を尋ねたり，想起量を数値で尋ねたりするなど，もう少し具体的に聞いていく必要があるだろう。また，同一性地位において問題なのは，想起する内容や深さ，時間，その時の環境などではないかとも推測される。これらについても尋ねる必要があるのではないか。

アイデンティティが確立されているほど自伝的記憶を多く想起すると想定したが，この考え方で行くと，拡散群の想起頻度は他群と同程度なのに，なぜアイデンティティが拡散していると判断されるのかという疑問が残る。拡散群は，自伝的記憶を想起しなかったりアイデンティティの形成を放棄したりしているのではなく，自伝的記憶を想起していても記憶を再構成して自己を定義付けできないために，このような結果がみられたのかもしれない。また，表 5 と後に示す表 9 より，〈価値観〉領域における多次元自我同一性尺度の全因子と回想機能尺度の第 1 因子（自己確認・方向づけ）・第 2 因子（気分安定・自己高揚）において，有意ではないが，拡散群がモラトリアム群よりも得点が高いことがわかった。さらに，多次元自我同一性尺度の第 1 因子（自己斉一性・連続性）においては，有意ではないが，拡散群が達成・早期完了・モラトリアム群よりも得点が高いこともわかった。拡散群がモラトリアム群よりも多次元自我同一性尺度が高いということは，拡散群はモラトリアム群よりもアイデンティティを形成しているということである。これは，先述したように，多次元自我同一性尺度の得点が〈価値観〉領域における同一性地位と一致しにくいか，あるいは，そもそも自我同一性地位面接の〈価値観〉領域に問題があるためではないかと考えられる。

(4) 同一性地位と自伝的記憶の機能（回想機能）との関連

回想機能尺度の項目の得点を，因子ごとに合計した。回想機能尺度と自我同一性地位面接の結果の関係を検討するために，自我同一性地位面接の結果を独立変数，回想機能尺度の結果を従属変数として，アイデンティティの領域ごとに，ANOVA 4 を用いて 1 要因分散分析を行った。各領域における，同一性地位ごとの回想機能尺度の下位尺度得点の平均値（SD）と分析結果を，領域ごとに表 8 と 9 に示した。

分散分析の結果，アイデンティティの〈職業〉領域では，回想機能尺度の第 4 因子（会話・情報伝達）において要因の効果が有意だった（$F(3,46)=3.43$, $p<.05$）。Ryan 法による多重比較の結果，達成群が拡散群よりも 5% 水準で有意に高いことがわかった。

〈価値観〉領域ではどの因子も要因の効果は有意でなかった。したがって，どの領域も第 1 因子（自己確認・方向づけ）には有意差が認められなかったので，モラトリアム群＞達成群＞拡散群の順で自伝的記憶を

表 6　同一性地位（職業領域）と自伝的記憶の主観的想起頻度の平均値（SD）と分析結果

	達成群(A)	早期完了群(F)	モラトリアム群(M)	拡散群(D)	F	p
想起頻度	4.00(0.74)	3.70(1.00)	3.88(0.90)	3.58(0.86)	0.48	n.s.

注）n.s. は p≧.10, ＋は p<.10, *は p<.05, **は p<.01 を表す。

表 7　同一性地位（価値観領域）と自伝的記憶の主観的想起頻度の平均値（SD）と分析結果

	達成群(A)	早期完了群(F)	モラトリアム群(M)	拡散群(D)	F	P
想起頻度	3.92(0.92)	3.88(0.83)	3.00(1.00)	3.78(0.79)	1.20	n.s.

注）n.s. は p≧.10, ＋は p<.10, *は p<.05, **は p<.01 を表す。

表8　同一性地位（職業領域）と回想機能尺度の下位尺度の平均値（SD）と分析結果

	達成群(A)	早期完了群(F)	モラトリアム群(M)	拡散群(D)	F	p	多重比較
第1因子 自己確認・方向づけ	53.82(14.53)	45.60(10.35)	49.76(10.70)	47.08(11.63)	0.93	n.s.	
第2因子 気分安定・自己高揚	44.91(11.07)	45.30(13.98)	44.18(11.92)	45.92(10.01)	0.05	n.s.	
第3因子 反省・振り返り	29.55(7.11)	29.70(7.96)	30.76(6.79)	26.58(5.82)	0.82	n.s.	
第4因子 会話・情報伝達	32.91(5.95)	30.20(2.82)	29.29(5.37)	26.17(4.41)	3.43	*	A>D

注）n.s. は p≧.10, ＋は p<.10, *は p<.05, **は p<.01 を表す。
　多重比較より有意差（p<.05）が生じた結果に不等号を示した。

表9　同一性地位（価値観領域）と回想機能尺度の下位尺度の平均値（SD）と分析結果

	達成群(A)	早期完了群(F)	モラトリアム群(M)	拡散群(D)	F	p
第1因子 自己確認・方向づけ	50.31(11.59)	51.96(11.83)	37.25(9.86)	45.44(10.53)	2.12	n.s.
第2因子 気分安定・自己高揚	46.54(6.37)	46.00(13.37)	35.25(14.57)	44.33(9.64)	1.04	n.s.
第3因子 反省・振り返り	30.62(6.10)	29.29(7.53)	29.75(2.17)	27.11(8.03)	0.42	n.s.
第4因子 会話・情報伝達	29.31(4.84)	29.17(6.21)	32.00(4.74)	29.67(3.50)	0.30	n.s.

注）n.s. は p≧.10, ＋は p<.10, *は p<.05, **は p<.01 を表す。

自己機能・指示機能として用いることが多くなるのではないか，という仮説①は証明されなかった。

〈職業〉領域の同一性地位による差がみられた第4因子（会話・情報伝達）は，過去の経験を人に話して役立てるための回想である。この因子において達成群が拡散群よりも得点が高かったのは，危機を経験した達成群のほうが他者に役立つエピソードを多く持っているだろうし，傾倒して自分の信念をしっかり持っているので，過去の経験を他者に話しやすいからではないかと推測される。また他の因子は自分に対しての機能であるのに対し，第4因子は他者に対しての機能である。したがって，自伝的記憶の機能については，他者への機能において同一性地位による差が現れやすいのかもしれない。

しかし，〈価値観〉領域については，〈職業〉領域と同じような差がみられなかった。これは，〈価値観〉領域のアイデンティティ形成には自伝的記憶が関与する度合いが低いからであるとも考えられるが，先に述べたように同一性地位面接の〈価値観〉領域自体に概念的あるいは方法論的な問題が存在するためなのかもしれない。

(5) 同一性地位と自伝的記憶の構成度との関連

自伝的記憶の構成度を植之原（1993）と筆者独自の評定基準により評定した。評定者間の一致率（2名による）を，被調査者50名中ランダムに選んだ10名のデータを用いて，コーエンの κ によって求めた。自伝的記憶の構成度のカテゴリーごとに，①特定性；κ＝.73，②精緻性；κ＝.71，③自我関与；κ＝.76，④命題性；κ＝.89，⑤関連性；κ＝.79 であった。いずれも，ほぼ完全な一致から実質的に一致していると言える率である。したがって，自伝的記憶のカテゴリー得点は信頼性があると言える。

また，自伝的記憶面接の項目をアイデンティティの領域で職業と価値観の2つに分け，それぞれの得点を自伝的記憶の構成度のカテゴリーごとに合計した。自伝的記憶面接と自我同一性地位面接の結果の関係を検討するために，自我同一性地位面接の結果を独立変数，自伝的記憶面接の結果を従属変数として，アイデンティティの領域ごとに，ANOVA 4 を用いて1要因分散分析を行った。このとき，独立変数と従属変数は同じ領域どうしを対応させた。各領域における，同一性地位ごとの自伝的記憶の構成度のカテゴリー得点の平均値（SD）と分析結果を，領域ごとに表10と11に示した。

分散分析の結果，アイデンティティの〈職業〉領域では，自伝的記憶の特定性において，要因の効果が有意だった（$F(3,46)=3.28$, $p<.05$）。しかし，Ryan 法による多重比較の結果，有意差は認められなかった。また，命題性における要因の効果も有意だった（F

表 10　アイデンティティの職業領域における同一性地位と自伝的記憶の構成度のカテゴリーの平均値（SD）と分析結果

	達成群(A)	早期完了群(F)	モラトリアム群(M)	拡散群(D)	F	p	多重比較
特定性	3.27(0.45)	4.10(1.04)	4.00(1.08)	3.53(1.09)	3.28	*	認められなかった
精緻性	10.36(2.06)	11.50(0.67)	11.12(1.13)	10.50(2.55)	1.27	n.s.	
自我関与	8.73(2.38)	9.00(2.19)	9.53(1.97)	8.62(2.62)	0.61	n.s.	
命題性	9.18(0.57)	9.20(0.75)	8.00(1.08)	8.63(8.66)	5.67	**	A>M·D, F>M·D
関連性	10.27(1.96)	10.60(1.02)	10.00(0.97)	8.64(2.37)	0.50	n.s.	

注）n.s. は p≧.10, ＋は p<.10, *は p<.05, **は p<.01 を表す。
多重比較より有意差（p<.05）が生じた結果に不等号を示した。
（　）内は有意差の傾向（p<.10）がある事を示す。

表 11　アイデンティティの価値観領域における同一性地位と自伝的記憶の構成度のカテゴリーの平均値（SD）と分析結果

	達成群(A)	早期完了群(F)	モラトリアム群(M)	拡散群(D)	F	p
特定性	3.00(0.00)	3.33(1.07)	3.00(0.00)	3.44(0.96)	0.68	n.s.
精緻性	9.62(2.24)	10.25(1.90)	10.50(1.12)	9.89(1.45)	0.39	n.s.
自我関与	7.92(2.34)	8.25(2.22)	8.75(1.79)	7.67(1.83)	0.29	n.s.
命題性	8.46(2.41)	8.79(1.71)	9.25(1.09)	9.44(1.07)	0.56	n.s.
関連性	9.54(2.06)	9.42(1.87)	10.00(1.22)	9.56(1.57)	0.11	n.s.

注）n.s. は p≧.10, ＋は p<.10, *は p<.05, **は p<.01 を表す。

表 12　アイデンティティの職業領域における同一性地位と「将来」項目における自伝的記憶の構成度のカテゴリーの平均値（SD）と分析結果

	達成群(A)	早期完了群(F)	モラトリアム群(M)	拡散群(D)	F	p	多重比較
特定性	1.09(0.29)	1.40(0.49)	1.18(0.51)	1.12(0.43)	1.85	n.s.	
精緻性	3.00(1.13)	3.80(0.40)	3.53(0.98)	3.30(1.07)	1.34	n.s.	
自我関与	3.27(1.05)	3.30(0.90)	3.35(1.03)	3.07(1.08)	0.94	n.s.	
命題性	3.18(0.57)	3.20(0.75)	2.00(1.08)	2.44(1.12)	5.67	**	A>M·D, F>M·D
関連性	3.45(0.99)	3.50(0.67)	3.35(0.97)	3.25(1.02)	0.16	n.s.	

注）n.s. は p≧.10, ＋は p<.10, *は p<.05, **は p<.01 を表す。
多重比較より有意差（p<.05）が生じた結果に不等号を示した。

(3,46)＝5.67, p<.01)。Ryan 法による多重比較の結果，達成群と早期完了群が，それぞれモラトリアム群と拡散群よりも 5% 水準で有意に高いことがわかった。

〈価値観〉領域では，自伝的記憶のどのカテゴリーにおいても要因の効果は有意でなかった。

また，自伝的記憶における差をより細かくみるために，自伝的記憶面接を構成する 6 つの質問項目それぞれについて，同一性地位による差を分散分析によって検討した。この結果，〈職業〉領域に入る「将来」項目の命題性のみに同一性地位による有意な差が認められた。(F(3,46)＝5.67, p<.01)。Ryan による多重比較の結果，達成群と早期完了群が，それぞれモラトリアム群と拡散群よりも 5% 水準で有意に高いことがわかった。「将来」における同一性地位ごとの自伝的記憶面接のカテゴリー得点の平均値（SD）と分析の結果を表 12 に示した。

これらの結果より，達成群＞モラトリアム群＞拡散群の順で自伝的記憶はより再構成され，命題との関連が高いだろう，という仮説②は，〈職業〉領域全体と，〈職業〉領域のうち「将来」項目においてのみ，達成群＞モラトリアム・拡散群，早期完了群＞モラトリアム・拡散群の順で命題性が高い，という形で証明された。〈職業〉領域，とくに「将来」は，大学卒業後の進路として重要な問題である。また「将来」について一定の方向性や信念をもつことは，これからの人生をどう生きるかという重要な問題なので，それだけ大きな危機を経験し，しっかり傾倒する必要がある。そのためには，繰り返し自伝的記憶を想起し，再構成することが重要になってくる。このような理由から，特に命題性というカテゴリーに差がみられたのだと考えられる。

植之原（1993）自身の研究では，〈職業〉領域の命題性のカテゴリーにおいて，達成群＞早期完了・モラトリアム群という差がみられた。この結果は，本研究の，達成・早期完了群＞モラトリアム・拡散群，という結果と類似している。本研究では達成群と早期完了群の間に有意な差が認められなかったが，今後，サン

プル数を増やして確かめる必要があるだろう。また，植之原（1993）では，〈価値観〉領域の関連性のカテゴリーにおいて，達成群＞早期完了群，という結果が出ているが，本研究ではそのような結果はみられなかった。この理由は推測することが難しく，今後さらに検討を続けなくてはならない。

まとめと今後の課題

青年期におけるアイデンティティの形成と自伝的記憶の関係を検討するために，大学生女性に面接と質問紙調査を実施した。アイデンティティの〈職業〉領域と〈価値観〉領域の同一性地位を判定して，自伝的記憶の特徴を分析した。

その結果，〈職業〉領域においてアイデンティティを達成，もしくは早期に完了している人は，想起する自伝的記憶の構成度に関して，将来の職業について問題認識が明確であることがわかった。また，アイデンティティを達成している人においては拡散している人よりも，人に話して役立てるために自伝的記憶を用いることが多いこともわかった。自伝的記憶の想起頻度においては同一性地位による差がなく，アイデンティティの形成と自伝的記憶の想起頻度には関連が無いことがわかった。

今後の課題としては，アイデンティティの〈価値観〉領域におけるモラトリアム群のサンプル数が少なかったので，全体的にサンプル数を増やして検討する必要がある。また，男性にも調査する必要がある。本研究では，面接内容の質的分析は，本研究の目的とは異なるため実施しなかったが，アイデンティティの一方の領域で同一性地位を達成しているのに他方では拡散していたり，自伝的記憶の想起頻度に同一性地位間で差がみられなかったりしたことから，今後質的分析をすることに意義があるだろう。

引用文献

日下陽子　2000　青年期の回想－自我同一性との関連から－甲南女子大学大学院　修士論文

Marcia, J. E. 1966 Development and validation of Ego-identity status. *Journal of Personal and Social Psychology*. **3**, 551–558.

無藤清子　1979「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性　教育心理学研究，**27**, 178–187.

Rubin, D. C., Rahhal, T. A., & Poon, L. W. 1998 Things learned in early adulthood are remembered best. *Memory & Cognition*, **26**, 3–19.

榊美知子　2006　自己知識の構造が気分不一致効果に及ぼす影響　心理学研究，**77**, 217–226.

佐藤浩一　2002　5章　自伝的記憶　井上　毅・佐藤浩一（編著）日常認知の心理学　北大路書房　Pp. 70–87.

佐藤浩一・槙　洋一・下島裕美・堀内　孝・越智啓太・太田信夫（2004）．自伝的記憶研究の理論と方法　日本認知科学会テクニカルレポート　No. 51

谷　冬彦　2001　青年期における同一性の感覚の構造－多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成－　教育心理学研究，**49**, 265–273.

谷　冬彦　2004　第1節　アイデンティティの定義と思想　谷　冬彦・宮下一博（編著）さまよえる青少年の心－アイデンティティの病理－発達臨床心理学的考察　北大路書房　p. 3

植之原薫　1993　同一性地位達成過程における『事象の記憶』の働き　発達心理学研究，**4**, 154–161.